

ISBN 4-903353-29-X

二松学舎大学日本漢文教育研究プログラム

2010日本漢文教育研究セミナー報告書

海外の学生を対象とする漢文教育

と き 平成22年9月8日～10日

ところ 二松学舎大学第3号館

趣 旨

日本漢文教育研究プログラムが実施する海外漢文講座は、二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」において開講して以来、ヨーロッパおよび東南アジアの諸大学の参加を得ることができた。

今回、これまでの活動を踏まえ、海外の学生を対象にした日本漢文学の教材や教授法などの課題についてあらためて検討を加え、併せて大学間の相互理解を深めることを目的とする。

日程・目次

【第1日】

— 開会挨拶 —	学長 渡辺 和則	1
	プログラムリーダー 佐藤 進	2

I 海外の大学教育について — 基調報告 —

1 欧州に於ける大学教育制度改革（ボローニャ・プロセス）について	3
2 EUが助成する Intensive Program について	6
3 ベトナムの大学における古典（漢喃文献）教育について	12

II 海外における漢文教育 — 今後の展望と課題 —

4 日本漢文教育研究プログラムの海外漢文講座について	13
5 実施報告 ドイツ	16
6 実施報告 タイ	18
7 実施報告 イタリア	24
8 (総合討論)	

【第2日】

III 日本漢文特別講義

9 江戸時代の漢籍と書肆	26
10 日本の古辞書	32

IV 教材と教授法（1）

11 公家の漢文日記	38
12 漢文訓読法	40
13 平安時代の漢文学	42

【第3日】

IV 教材と教授法（2）

14 江戸の儒学	51
15 幕末・明治の漢文	57

V セミナー総括討論

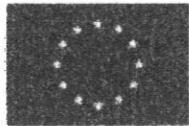
16 総合討論	59
— 閉会挨拶 —	

2 EUが助成する Intensive Program について 「ヨーロッパにおけるこれからの漢文教育の展望」

カ・フォスカリ大学
アルド トリーニ

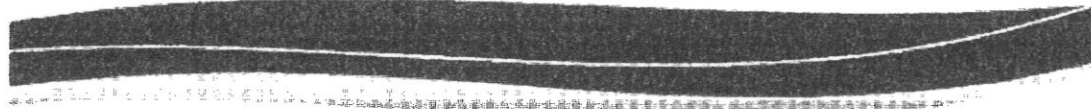
* * * *

二松学舎大学の日本漢文教育研究プログラム：「グローバルな漢文教育法開発の共同研究」を実現するためのEUにおける具体的な一考察であり、将来に向かって、EU内における漢文教育の研究と習得の発達と普及のためへの提案である。



Education and Culture DG

Lifelong Learning Programme



http://ec.europa.eu/education/erasmus/doc900_en.htm

ERASMUS Intensive programmes

An Intensive Programme (IP) is a short programme of study which brings together students and staff from higher education institutions of at least three participating countries. It can last from 2 weeks or 10 continuous full days to 6 weeks of subject related work.

An IP aims to:

- **Encourage efficient and multinational teaching of specialist topics** which might otherwise not be taught at all, or only in a very restricted number of higher education institutions;
- Enable students and teachers to work together in multinational groups and so benefit from special learning and teaching conditions not available in a single institution, and to gain new perspectives on the topic being studied;
- **Allow members of the teaching staff to exchange views on teaching content and new curricula approaches** and to test teaching methods in an international classroom environment.

What does an Intensive Programme involve?

- An Intensive Programme can be a one-off activity or repeated over a limited number of years (maximum duration of funding three consecutive years with an annual application round).
- It may not consist of research activities or conferences, but **should provide something new in terms of learning opportunities, skills development, access to information, etc.** for the participating teachers and students and promote an element of curricular development.
- Effort should be made that the workload of participating students is recognised, preferably in terms of ECTS.
- **IPs are expected to use ICT (Information and Communication Technology) tools and services to support the preparation and follow-up of the IP**, thereby contributing to the creation of a sustainable learning community in the subject area concerned.
- The ratio of staff to students should guarantee active classroom participation.

What criteria must an Intensive Programme respect?

- **The consortium involves at least 3 participating institutions from 3 different countries** participating in the Lifelong Learning Programme. At least one participating institution must be from a Member State of the European Union.
- The planned location of the Intensive Programme is in a country which is eligible to participate in the Lifelong Learning Programme.
- **The number of students** travelling from countries other than the country where the Intensive Programme takes place **must be minimum 10.**
- The activity plan should include **at least 10 continuous working days** of subject-related work (virtual cooperation activities like e-learning as part of the IP will not be taken into account).
- The Intensive Programme must take place without interruption and subject-related work days can only be separated by weekends.
- Proposals that are integral part of an Erasmus Mundus Master Course are not eligible.

How will an Intensive Programme be selected?

Priority will be given to Intensive Programmes which:

- are part of integrated programmes of study leading to recognised double or joint degrees (with the exception of Erasmus Mundus Master Courses which are not eligible);
- present a strong multidisciplinary approach;
- focus on subject areas which are currently under-represented in Erasmus student mobility (over-represented areas: business studies, social sciences, arts, humanities, languages, law).

第1：IPプロジェクト (Intensive program)

まず、IPが受けられなかった理由を述べたい。2009年2月にEUが主催するIP (Intensive program、IP) を申請した。IPとはEUの3以上の大学が一つのテーマについて、共同で学生に集中教育活動を行うプロジェクトである。私が申請したテーマは「漢文教育」の集中講座であった。

このプロジェクトに加わった大学は、ヴェネツィア大学のほかに、ドイツのハイデルベルク大学 (J. アロカイ先生)、ベルギーのレーベン大学 (W. ヴァンドウワラ先生) とハンガリーのブダペ

スト大学（I. シェルダヘリ先生）であった。これらの大学では漢文が教えられており、二松学舎大学の先生方の集中講座を受けた関連があったから。企画としては、4大学の学生を集めて、二松学舎大学の先生方と一緒に4大学の先生方が漢文訓読を教えるものであった。

今年の7月上旬に結果が出たが、残念なことに受け入れられなかった。その一番の理由は「EUにおける重要性が認められない。」ということであった。ヨーロッパにとっては、日本古典研究は遠い存在であり、現在世界の中で投資すべき分野ではないと考えられている。残念な結果だが、現在のEUの態度を示しているというほかはない。

なお、EUのガイドラインに明記されているように、言語学は over-represented area（プロジェクトの数が多すぎる分野）に当てはまるので、その分野のプロジェクトが採用しにくいという事実もある。

このような状況の中で、どうすればその態度を変えられるか、つまり、私たち日本研究者にとっては、漢文は余計な学問ではないと解ってもらう必要がある。すくなくとも、日本研究の中で、漢文教育の位置づけをはっきりする働きかけしなければならない。時間のかかる申請だが、数多くの大学からその要望を繰り返して出すしかないと思う。

IPのプロジェクトは実現できる環境づくりとして、EUにおける漢文教育の向上のために次のポイントを提案したい。

第2：EU内に現在漢文教育が行われている施設とその詳細（情報収集）

EU内に漢文教育が行われている施設（大学）はどれぐらいあるか、現在誰もよくわからないのが現状である。基本的な情報だが、残念ながら今までは、その必要性が感じられていなかった。その理由は二つある。：1. 漢文教育は最近まで非常に少なかった、2. 行う所は個々に講座を設け、相互の係や経験の交流をしなかった。私は去年、「PMJS (Pre Modern Japanese Studies)」のメール・グループを通して、アンケートを行った。EU内に“Classical Japanese Language”（古典語、漢文を含めて）はどこで教えられているかを調べるためである。多くの回答が届き、一般的に、古典語教育が増えていることがはっきりと分かった。特にドイツとフランスが多いことが目立っている。しかし、情報を集めても、毎年カリキュラムが変わる可能性があるため、情報のアップデートが大変難しい。概して、総括的な日本研究を行っているところでは、古典語教育が欠かせないことは当然である。更に、交流や共同教育や研究のため、そういったDBが大切な役割を果たすに違いないと思う。つまり、個人的な連携を超えた組織が望ましいのである。

第3：EU内大学の関係と協力

EU内のもっと実用的な交流と関係が実現すれば、現行の孤立的・個人的な漢文教育を越えて、もっと構造化された教育ができる。力を合わせれば、今の個人的な経験に基づいた教え方を、もっと効率的にできるのではないか。EUの大学制度がだんだん同形化するなかに、日本研究、古典語も含めて、同一にならなくても、ある程度、一定の基準を満たすことが望ましい。EAJS^(注1)、EAJRS^(注2)、AJE^(注3)などのなかに古典語の教員や専門家が集まったグループとしてより活発的な役割を果たすべきである。たとえば、EAJS 学会を利用して、パネルを組んで古典語教育の諸問題について語り合うのが望ましいのである。

第4：EU内漢文教育・研究のシンポジウム

学会の中のパネルでなければ、シンポジウムを主催すれば、古典語教育の出発点になると思う。幅

の広いテーマを中心に、漢文教育、漢文の必要性、漢文講座をどう増やすか、教材づくり、教員の育成、EU内教員の関係や協力などの議論ができれば大変役立つであろう。現在漢文教育の教員がまだ少ないと言っても、将来を考えて、漢文教育のガイドラインを考える時期になっているのである。実は、現代日本語教育と違って、古典語の場合は、教育方法は、日本国内の経験を別として、外国人学習者向けはまだ初期レベルにしかない。去年、ヴェネツィア大学で行われた漢文教育の集中講座の最後（2月27・28日）、「漢文教育ワークショップ」という小さい規模ではあるが、有意義な漢文教育におけるワークショップを開いた。第一歩を踏み出し、国際的な環境の中で、発表や議論を交わした。今年、同じ場所で、9月24・25日に、第2回目の「漢文教育ワークショップ」が実現される予定がある。これから、できるかぎり、将来に向けてこの「漢文教育ワークショップ」を続け、少しずつ規模を大きくするつもりである。

第5：EU・日本の関係、協力と共同プロジェクト

しかし、EU内関係や協力が大事にしても、日本である「母国」との交流が同じく大切である。日本人の専門家との関係、交流や指導が欠かせない。われわれ、EUで漢文教育に携わっている教員や専門家は日本の同僚に何を期待しているか、何が一番ほしいか、何が一番望ましいか。具体的に言えば次の4点だと思う：1. 指導、2. 資料、3. 学生や若手教員の共同育成、4. 共同研究やプロジェクト。以下に、この4点について触れる。

第6：共同教材づくり

EUにおける漢文教育の緊急な課題の中で、ヨーロッパ人向けの教材作りが一番要求されている。それができれば、段階的にEUにおける漢文教育の共同基盤教材か、参考書になれば喜ばしい。EU内に学生交流（例えば、エラスムスプログラム）が活発的に行われているが、その交流が有効に行われるために、できるかぎり同じようなカリキュラムや講座の内容があったほうが望ましく、それにも向けて、共同教材があれば助かるのである。漢文教材づくりはいうまでもなく、チームワークであって、EUと日本の教員や専門家が一緒に取り組むべき課題だと思う。その教材は将来に向かって、漢文教育のベースとなり、更に漢文教育の具体的な一段階にもなるのである。

第7：共同（集中）講座（IPプロジェクトのように）

先に述べたように、申請したIPプロジェクトがEU側に採用されなかったことは残念である。アイデアとしては、できるかぎり実現すべきである。つまり、IPプロジェクトのような共同集中講座が望ましいであろう。外国人学習者に日本とEU教員が共同で一週間、長くて10日間の集中講座を開き、その国際的、多種多様な経験環境の中に具体的な課題に取り組んで、相談や議論をしながら大に刺激的な経験となると思う。

第8：若手研究者の育成（留学・共同トレーニング）

現在、EUで漢文を教えている教員は数少なく、教える側も必ずしも専門領域でないのが現状である。今は初期段階であるから、それでもよいと思うが、今こそ将来を考えなければならない時期である。大事な課題の一つは、若手研究者と教員の育成である。そのために、EUで育った若手には、日本でも知識を深めるチャンスを与えることが大変有意義だと思う。大学間または学部や学科間の提携を結ぶことによって、学生交流（一方的になる場合もあるが）、つまり日本で学ぶチャンスを与える

ことを行えば、EU学生や若手の研究者のレベルが上がり、動機づけにもなるに違いない。

第9：EU教員のアップデートと連携

学生や若手の研究者に日本で学ぶチャンスを与えることだけではなく、現在漢文教育に携わっている教員や専門家にも最新の情報を得、知識を深めることも大事だと思う。簡潔に言えば、現在のEUの先生方の知識は次の世代に伝わるため、その知識をできるかぎり高くすることができれば、後々の教育がよくなるはずである。

第10：資料のアクセス可能性と共有

いうまでもないが、EUの教員や専門家が日本に行くときは、必ず大部分の滞在時間を資料の収集に使うのが普通である。ヨーロッパではやはり漢文に関する資料が乏しいからである。研究だけではなく、授業に使う資料を獲得することも簡単ではない。日本に行かなければ手に入らないし、日本に行っても、簡単に資料にアクセスできるわけでもない。だからこそ、いろいろな形で、たとえばメディアを使って、資料の獲得ができるようにすればありがたい。

第11：漢文教育の新鮮なアプローチ（共同研究）

相談しながら、外国人学者に適した漢文教育方法を見つけ出すことが必要とされる。日本側は日本語母語の学者に教える経験しかないし、EU側はヨーロッパ人に教える経験があっても、漢文はほとんどの場合初めてである。だからこそ、両者が一緒になって議論を行うべきである。つまり、漢文教育の新鮮なアプローチが求められている。視野をより広くすれば、漢文は「死語」として、他の死語と並べることができる。違う環境や場所で同じような役割を果たした「ラテン語」と「古典ギリシャ語」に並べてもおかしくないと考える。ヨーロッパと東アジアで共通語だけではなく、古典語という役割を果たし、現代文化や言語の形成に大きく貢献した言語だから、死語として今の世代に伝える価値が高い。ヨーロッパではラテン語と古典ギリシャ語の教育方法が発達していて、日本では同じく漢文教育を発展させたが、「死語」教育として、東西問わず、どのような共通点があるのかは面白い課題であると思う。

漢文教育の必要性についていえば、少なくとも幕末までの資料に直接アクセスできるためには、欠かせない言語能力である。今の学界では、原文に基づいた研究しか認められないのが現状である。

しかし、それだけではなく、漢文を習うことはもっと幅の広い意味を持っていると思う。去年、外国人学習者に漢文を教える主な理由を並べたので、今回は繰り返さずに、ただ主なポイントだけ指摘したい。

1. 言語のより深い理解（言語の働き・特徴・可能性）
2. 翻訳の技術（幅広い意味での翻訳。西洋の翻訳との比較）
3. 現代日本語の形成の理解
4. 特殊な言語現象としての漢文訓読
5. 日本文化の伝達と形成の重要なツールとして

結 論

以上、EU内で行われている漢文教育についての現状や、これからの発展のために色々な課題を述べてきた。纏めてみれば、EU内、それからEUと日本の連携、協力、情報交換、資料アクセス、教

材づくり、若手の育成などが緊急課題であると思う。一言で述べれば、ばらばらに個人的に行っている今のアプローチを越えて、新鮮な教育方法に基づいた組織的な漢文教育が望ましいのである。

注)

- 1) EAJS : European Association of Japanese Studies.
- 2) EAJRS : European Association of Japanese Resource Specialists.
- 3) AJE : Association of Japanese Language Teachers in Europe.

